

2022. 11. 27. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書12章22～34節
『小さな群れよ』

本日の聖書の箇所は「思い悩むな」という小標題から始まる馴染み深いイエスの勧告の言葉が続きます。

22節から30節までは思い悩む結果に応じて、はたして寿命をわずかでも延ばすことができようかと問います。そして、今日の説教題に掲げた「小さい群れよ」(32節)という呼び掛けを通して「神は喜んで神の国をくださる」と結んでゆきます。ルカは「問い」と「応え」という対話を用いて物語を味わい深く展開してゆきます。

当時の初代教会を取り巻くユダヤ教の教えには「神を忘れない者には長寿と子宝が約束される」(申命記11;21)とあります。これが初代教会が福音をの宣べ伝え始めた頃の「常識」だったのです。おそらく人々はこの言葉(シエマー)ゆえに、せっせと神殿詣でをし、献げものを行い、律法を守ったものかと考えられます。

いわば長寿と子孫繁栄という誰もが関心を寄せる事柄を「人質」に取り、人々を締め上げる方法論であったことと思います。その結果、若くして命を閉じざる得なかった人々や、子どもの与えられない夫婦には「信仰がない」という宗教的のみならず社会的制裁が加えられるという「事件」が続発致しました。

初代教会はそのような「信仰がない」とレッテルを貼られる自分たち「小さな群れ」の自己理解をユダヤ教とは一線を画した宣言を行い自己確認作業を推し進めます。それが本日のこのオリジナリティーに溢れた革新的な箇所なのです。

この32節の記事はルカ固有の神学です。ルカは神の国とは、つまり神が優先的に愛されるのは誰なのかという「問い」と「応え」を用意するのです。

それは律法を遵守・履行することに血道を上げるような生活や人生観や社会の中には存在しません。そんなところに正義や純粋や真実を、そして信仰などというものを決して置かないというルカの宣言なのです。

ルカは神の国を、小さな者・幼児(10;21)、病人(10;9、11;20)、子ども(18;16)、貧しい者(6;20)に最優先に与えられると繰り返し語ります。そして、その弱く・小さい者が第三者を指し示すのではなく、まさに今を生きる「わたし」と「あなた」のことであるという現実気付くことを迫るのです。そして、このことを喜びをもって現実の中に具体化してゆくこと、そこに「アーメン」(真実)と唱和する共同体である「小さな群れ」が生まれるのです。ルカはこれを「教会」と言うのです。

わたしたちは正義や真実とかいった言葉の持つ響きに以外に弱いのです。この類の言葉は、それ自体そうでもないのに、聞く者がどこかしら断罪されているような印象を受ける言葉です。つまり、この言葉が発信されたなら、その発信元にいち早く与しておけば自分は問われなくて済むと感じてしまう価値判断の一辺倒という匂いを嗅いでしまうのでしょう。それはわたしたちが皆、これらの言葉の前でためらいを感じるような不正や不実なところをひそかに持っているからなのでしょう。

ルカは、そのようなわたしたちに対して自省の甘さを問うのです。本来、正義や真実といった言葉は人の口から出るべきではないというのです。それはイエスの側から「小さな群れ」に発信される言葉なのです。